(9) 療育を経た自閉症児の親が子どもの育ちを支えていける気持ちを持つまでのプロセス研究

医療福祉学研究科医療福祉学専攻修士課程　◯利守　愛子
医療福祉学研究科　諏訪　利明
医療福祉学部医療福祉学科　下田　茜
医療福祉学研究科　長崎　和則

【背景および目的】

自閉スペクトラム症児（以下 ASD 児）を含む発達障害児の親の子育てを支援するために，厚生労働省が策定公表した「児童発達支援ガイドライン」がある．そこには「家族支援」について，保護者が子どもに障害があっても子どもの育ちを支えていける気持ちが持てるようになるまでの過程を支援するという一定の方向が示されている．

本研究では，ASD 児の親がわが子に障害があっても子どもの育ちを支えていける気持ちを持てるようになるプロセスを親側の視点から明らかにし，効果的な支援の要素を抽出することを目的とする．

【方法】

A 県内で児童発達支援事業を利用した経験のある，ASD 児の保護者を調査対象者とし，A 県内の自閉症児の親の会2団体を通して募集チラシを配布し，公募した．インタビューガイドに従い60分程度のインタビューを実施した．分析方法として M-GTA（修正版グラウンデッド･セオリー･アプローチ）を採用した．

【結果および考察】

調査対象者として14名の応募があった．応募は全て母親であり年齢は39～49歳であった．母親の療育経験期間は2年～15年3ヶ月であった．現在14名の語りを逐語録に起こし，M-GTA 研究者の指導の下，1人分の語りについての分析検討を行っている．分析の過程において，今まで「療育」という言葉で片づけていたその中身である「母親の視点から捉えた時，誰との相互交流があり，何が起きているのか，そしてなぜ母親が変化していったのか」についてのプロセスが母親の語りの中から見え始めた．当日は現段階で抽出されている概念を通して見えてきていることについて報告する．報告後引き続き，残り13人の語りと照らし合わせ分析をおこなっていく．